

編 集 後 記

今年は東京の桜の開花が3月下旬と、名古屋より随分早かった。桜の開花も南から順番に咲くわけではなく、その年のその土地の気候条件に左右されることをあらためて感じさせられた。

さて今年は新臨床研修制度を修了した後期研修医を初めて迎えた。4月に新人を迎えたところ、そうでなかったところ色々あるに違いない。大学で初期研修を行う医師が減っていることは紛れも無い事実で、すでに40%台になっておりこの傾向はますます進むものと思われる。人気のある市中病院では50人もの研修医を抱えているところもあるという。毎年全員を雇うわけにもいかないだろうから、彼らの多くはいずれ出身大学に帰るといふ人もいるが、どの大学、どの施設に帰るかは彼らに選択権がある。新臨床研修制度修了、初年度の後期研修医の動向はどうであったのだろうか。志望者が漸減傾向のあるところにとっては関心のもたれるところである。やる気のある奴だけでよいと構えて待つのもよいが、そんな施設はすくないと思う。大学の施設にとっても、従来の博士号の獲得の道を指し示すだけでは不十分で、専門医を養成するプログラムの提示も求められているところである。またこれらに囚われない特徴あるプログラムを掲げて、独自の専門医養成を目指している施設もある。また彼ら後期研修医も千差万別であろうから、最終目標は同じかもしれないが、そこへ到達するためにはいくつもの道があってもよい。小生も当院の後期研修担当として時間を費やして後期研修プログラムの取りまとめや共通フォーマット化を準備してきたが、そこには実に98コースものプログラムが提示されている。これらが本当に担保できるのか、こんなことが可能なのだろうか、と考えさせられるものもあるが、提示できたこと自体が画期的なことであり、その充実に向けて一層力を尽くすつもりである。

昨今考えていることを述べさせていただいたが、会員の皆様にはぜひとも2年ぶりに新しく迎えた若い外科医にも本誌への投稿を指導していただきたい。その際に一つお願いしておきたいことは、投稿された論文の中には画像や標本写真などをもっと読者の側にたって、すなわち判り易い写真かどうかを考えて提出しているのか疑わしいものがある。これらの写真の撮り方、提示の仕方のご指導も併せてお願いしたい。

(宮川 秀一)